

# アイアンブリッジ

小さな峡谷に建つ鉄の橋

## 金本美幸

KANEMOTO Miyuki  
日本交通技術(株) / 設計第一部 / 第三設計課



イギリス中部のバーミンガムから北西へ約40km、テルフォードという新都市の南に位置する「アイアンブリッジ」。約200年以上の時を経て今も当時と変わらぬ姿を残している。見渡す限り畑のみという平らなイギリスの景色が続く中、世界で最初の鉄の橋「アイアンブリッジ」が架かる峡谷へと向かった。

現在では「アイアンブリッジ」が地名となっているが、コールブルックデールと呼ばれていたこの地域は、「アイアンブリッジ」が建設された18世紀末には世界一の規模を有する製鉄所であった。製鉄業発祥の地、つまりイギリス産業革命発祥の地である。

静かな街並みに入り、気がつけば道の左手は切り立ち、川が流れている。これがイギリスで最も長いセバーン川である。

セバーン川を挟んだこの峡谷は、鉱山があり、鉄を溶解するための燃料となる木々があり、そして川は水車を廻し常に火を起こすための風力を生み、製品の安価な輸送を可能とした。しかしこの川を横断する橋が存在しなかった。乗客を運ぶフェリーはいくつかあったものの、いずれも馬車を運ぶことはできず、増水期は非常に危険であった。

道の両側にレンガ造りの家や店が並びだしたと思ったのも束の間、突如「アイアンブリッジ」が姿を現した。何と可愛らしい橋だろう。第一印象はいい意味で想像を裏切った。駐車場が近くにないため一旦「アイアンブリッジ」を通り過ぎ、『アイアンブリッジ博物館』の一つである『峡谷博物館』の駐車場にバスを止めた。

現在「アイアンブリッジ」を中心に約6平方マイル(15.53km<sup>2</sup>)の範囲で、峡谷の両側に6つの博物館、5つの主要な産業遺産や社会生活に関する史跡が『アイアンブリッジ博物館』として保存されている。社会教育施設として位置づけられ、文化遺産の勉強をする講習場を設けるなどして人材育成も進められている。

バスを降り、「アイアンブリッジ」まで川沿いの道がちょっとした散歩となる。右手にセバーン川、左手にきれいな花を飾ったレ

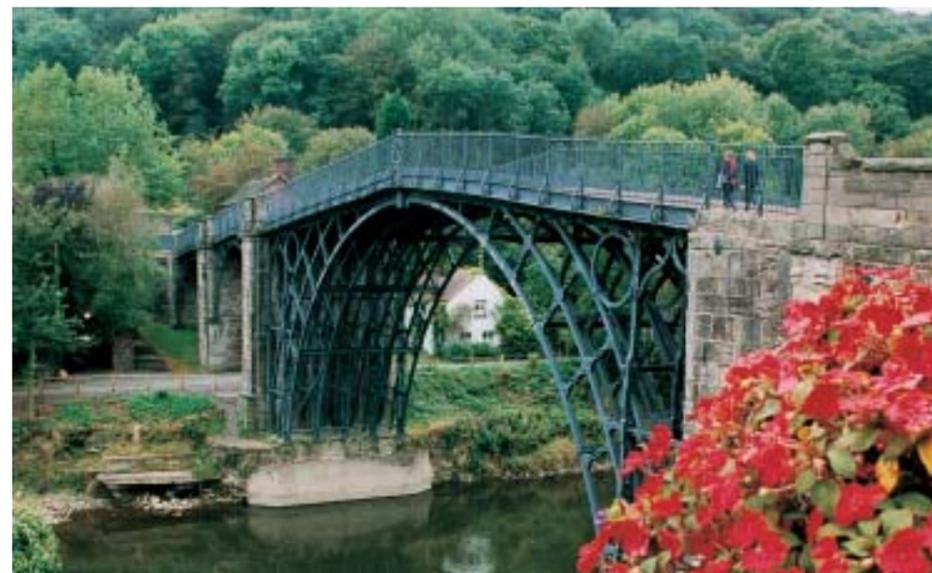


写真1 - アイアンブリッジ



写真2 - 1795年、身長170cm以上はあるボランティアガイド：アラン氏の背を越える所まで増水。2年前にもこの近くまで増水したらしい。(川沿いにある『峡谷博物館』にて)



写真3 - 地元の小学生達が先生に連れられて青空授業

ンガ造りの家並みが続く。よく見れば、花を吊っているのはアイアンブリッジのデザインによく似た鉄のフレームである。歩道と車道の境や川へと続く階段にも鉄が使われていることから、鉄は生活の一部であったことが伺える。橋を架けるために鉄を用いるという大胆な発想にも納得できる。

道の途中で階段を降り、まずは「アイアンブリッジ」の足元へ。全4径間のうち、石積みのみでできているアプローチ側(左岸側)はメインアーチの足元まで行くことができる。近くで見ると木橋を手本としたくさびやほぞ穴が接合部に使用されている様子がよくわかり、また橋の

真下まで来ると鑄鉄の粗い肌を直に感じるができる。

橋をくぐり抜け、次に橋の上へと出た。この日はあいにくの曇り空で今にも雨が降り出しそうな天気であったが、黒々として寒々しい鑄鉄とはう



写真4 - 鉄が街の至る所で用いられている



写真5 - 橋の部材接合部



写真6 - 右岸側から望む 温もりを感じる優しい肌色をした歩道面

って変わり、優しい肌色をした歩道面には温もりを感じる。高欄はシンプルであるものの、中央部には花をあしらった様なデザインが施されており「アイアンブリッジ」の繊細な一面を知ることができた。

橋を渡り今度は鑄鉄の2径間アーチでできたアプローチ部(右岸側)の足元へ。すぐ近くには小さな家が建ち、中から水の流れる音が聞こえてくる。200年以上の時を経て建つ「アイアンブリッジ」と、変わらぬ人々の暮らしが共存している。

川を渡る手立てはやはりこの「アイアンブリッジ」のみ。ということで、再び「アイアンブリッジ」を渡る。駐車場への帰り道、今一度「アイアンブリッジ」を振り返って見る。

フレームいっぱいになる写真の「アイアンブリッジ」は堂々と建ち、むき出しの鑄鉄は無愛想で冷たく感じていたが、小さな峡谷に建つその姿はとても静かで優しく、そしてなぜか愛らしい。訪れてみないとわからないその存在感がある。また、是非訪れてみたい。

(写真：1、小松 豊 6、塚本敬行 他、筆者)

参考資料

- 1)アイアンブリッジ、1889年(建設図書)
- 2)ヨーロッパのインフラストラクチャー、1997年(土木学会)
- 3)産業遺産(日本経済新聞社出版)